

昨日からの脱出

神蔵 器

俳句における類想句、類似句は芭蕉の時代から常に問題になっていた。俳句が続くかぎり、また俳句人口が多くなればなるほどこの種の俳句が多くなるのは必定であり、現在の俳句界のあり方では完全な解決方法は期待できない。

はつ午や煮しめてうまき焼豆腐 万太郎
この句に対してすでに小沢碧童に、

初午や煮つめてうまき焼豆腐

があるのを指摘されたとき、万太郎は焼豆腐は煮しめるものであって煮つめるものではない、と言ってつっぱねたと聞いている。たしかに焼豆腐は煮しめるものであって煮つめるものではないことはそのとおりであるが、万太郎が発想の段階において碧童の句を知っていたのか、知らずに作ったのかということになると問題が残る句である。

昨年第二十二回の俳人協会全国俳句大会でも八犬と犬狷夫と獺夫すれ違ふVが、大会賞の決定後になってから類句ありとして取消しになり、五十五年の第十九回大会においても、△涅槃図の裏側真つ赤かもしれぬVが、今瀬剛一氏の五十三年度「約束」収録の、

雪嶺の裏側まつかかも知れぬ 剛一
に抵触していたので話題となった。この句などはきわめて意外性のある句で、自由な想像の中で研ぎ澄まされた感覚によって、はじめて見えてくる世界である。それだけに選者としてもまさか類句があるとは思ってもみなかったろう。

また昨年度同大会の予選をしていて驚いたことは「胎の子」を詠ったものがかなりあったことだ。これは前年度の朝日新聞社賞・全国俳句大会賞を獲得した八胎の子の力もかりて大根引くVがあったからで、毎年「涅槃図」や「遍路」の句の多いのも気になるところであるが、まして「胎の子」がそうそうできたものではなかったものではない。もちろん類想句も許される範囲はあるけれども、それに甘えては俳句は混乱を招くばかりである。

ではなぜ類句がこのようにできてくるのであろうか。その理由は俳句が十七文字の短詩型であること、季語を必要としていることの二点が第一に考えられる。

まず十七文字であるが、私共の仲間の宮城白路氏が計算してくれたところによると、一七個の片仮名の単純な組み合わせで、三五五兆六八七四億二八〇九万六〇〇〇となり、さらに俳句に使えものを三パーセントと見ると、その数は一〇兆六七〇六億にがしとなる。三〇〇万人の俳人がせつせと作っても七万年以上もかかり、地球が消滅するまで作り続けても作り尽くせないだろうとあった。しかし俳句に使えるものといっても、俳句は詩であり、リズムがあり、作者の意志を伝える一つの世界を生むものである。そのうえ私たちが実際に使っている言葉、生きた語彙ということになると、その数は極めて少なくなるはずである。

さらに季語についてみると、一般に使われている季語は驚くほど少ない。ここに一例として『分類季句集』がある。昭和五十四年に明治書院から刊行されたもので、第一句集「凍港」から第十五句集「雪嶺」までの句を季語別に分類したものである。句数は約八二〇〇で、使われている季語は一〇三四である。角川の『俳句大歳時記』季語数は五八六七（ただし傍題は含まない）である。誓子氏は約五分の一の季語を使っていることになる。これはたいへんな数字で、ラグビーとか初ゴルフなど新しい季語にも積極的に挑んだ誓子氏であったからで、一般の俳人はせいぜい二〇〇か二五〇くらいの季語しか使っていない。ついでにいま少し詳しく書くと、一句しか作られていない季語が三一五もあり、最も多いのは「雪」で三七八句にも及んでいる。「蟋蟀」一三八句、「寒い」一〇七句、「蟹」九七句、「鴈」九六句、「蝶」八二句、「泳ぎ」八二句、「螢」七八句などが多いところである。

これを見ても誓子氏の好みは歴然と出ており、このことは俳人の誰もが多少少なかれ持っていることで、毎年毎年同じ季語によって作句されていることが意外に多いのである。

第二は内容であるが、俳句は自然と自然に影響される人間の生活の中に生まれ、きわめて限定された作者の体験の詩への昇華である。そして自分の体験は第三者に共鳴される必要があり普遍性が要求されるのである。桑原武夫の「第二芸術」には△芭蕉を捨てなかつたところに墮落の原因があったのである。およそ芸術において、天才の精神と形式とを同時に学ぶことは許されない。かくするとき精神は形式に乗ったものとして受けとられ、精神そのものも形式化

するのは必然であるVとある。今日の俳句が芭蕉と同じような形式を取り、さらに芭蕉以後およそ三〇〇年の伝統を守り続けてきている。しかも季語の働きそのものはたとえ「時雨」というものはこうしたものであり、「春の海」とはこうした趣のあるものであるといったふうに、歳時記の解説ぐらいのところは読者の承知しているものとして、読者を信用して詠っているのである。個の純粹さと普遍性は相反しながら日本人の特性のようなものの上に胡坐をかいてしまふ奇妙な安心感に浸っている。いい句ができたとき、こんな句はどこかにあったのではないかと、潜在意識の復活をしばしばおそれるのであるが、いい句ほど日本人の持つなつかしさに触れ、歴史の流れの呼吸と合致する。つまりそれだけ類句の心配が出てくるのである。

どうも悲観的なことばかり書いてしまったようだが、私たちは誰がなんと言っても有季定型の上に立っていることは否定できない。もし俳句の形式を離れ、否定するなら私たちはもはや俳人ではあり得ない。創作意欲が退化し、詩精神が弱まってしまったら、俳句に限らず、いずれの文芸においても類想化してしまう。また俳句そのものに前途がないのなら早めに見切りをつけるのが賢明かもしれないが、視覚的写生から心象的写生へ、一元的から多元的へ、自然の真から文芸上の真へ、虚と実、裏の裏は表とは笑い話ではない。可能性はいくらも残っているのである。五七五という形式も反発力を増すバネのようなものである。土俵があるから相撲が成り立つので、私たちは類句をとやかく言うより、自分自身の昨日からの脱出を心がけねばなるまい。